

平成26年度 県立阪神昆陽高等学校 学校自己評価

<p><b>教育目標</b></p> <p>1 設置趣旨及び県が目指すべき3つの人間像を踏まえ、生徒一人一人の「生きる力」の育成</p> <p>2 併設の阪神昆陽特別支援学校との交流及び共同学習の推進</p> <p>3 高校生ふるさと貢献活動事業等を活用した地域に愛される学校づくり</p> <p>4 教職員の豊かな人間性や専門性、実践的指導力の向上</p>	<p><b>学校経営方針</b></p> <p>1 生徒の興味・関心や、多様な学習ニーズに応じて、主体的に学ぶことができる多部制単位制高等学校として、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を育む。</p> <p>2 阪神昆陽特別支援学校が同一敷地に設置されたメリットを最大限に生かして交流及び共同学習を推進し、ふれあいを通じた豊かな人間性を育むとともに、社会におけるノーマライゼーションの理念を進展する礎となる学校をめざす。また、両校の実践を県内のみならず全国へ発信する。</p> <p>3 学校評議員制度や高校生ふるさと貢献活動事業、特別支援学校交流・体験チャレンジ事業などを活用して、伊丹市池尻地区や尼崎市西昆陽地区など、学校周辺の地域と連携した教育活動を推進し、地域に開かれた、地域に愛される学校をめざす。</p> <p>4 「教育は人なり」という言葉がある。両校の教職員は、教育の専門家としての使命感と高い倫理性を保持し、豊かな人間性の涵養に努める。また、専門性と実践的指導力の向上や、社会の変化に対応した教育観を培うことをめざして、研修と修養に努める。</p>
---	--

評価点：十分に達成できた=4、概ね達成できた=3、あまり達成できなかった=2、達成できなかった=1

領域	評価の観点	評価項目	実践目標	本年度評価	成果	課題	改善策
開かれた学校づくり	保護者・地域等への情報発信等	1	ホームページや各種通信等により、適宜、保護者・地域への情報提供を行う。	3.2	1 本校の活動を広く紹介しようとする管理職の意欲が高く、効果的な情報提供が行えた。 ②ホームページが定期的に更新され、学校の情報の提供を行うことができた。今年は修学旅行の様子などを追加し、生徒・保護者・地域への情報提供が進んだ。 ③各部の通信等がよく発行されており、情報の提供への取り組みは充実している。 ④各市教委、各中学校との生徒情報交換等が実施されており、生徒指導等の対応に有効である。	1 ①本校のミッションやめざそうとするところを、さらにどのように発信していくか。 ②各家庭へ、文書等を定期的に郵送しているが、実際のところ、内容物を確認されていないケースが多い。 ③ホームページ（特にトップページ）の「動き（＝更新されている感）」が乏しい。 ④初めて全国大会に出場したにも関わらず、部活のホームページの更新ができていない。 ⑤休み中や突発的な事態にホームページが迅速に対応できるようにする。 ⑥WEBページの大幅なリニューアルをするには、特別支援学校との調整、担当者の業務時間などに制約があり、困難である。 ⑦本校生徒自身が活用できていない。生徒や保護者がホームページを活用しているのかを調査すべき。 ⑧一部地域の市教委との連携が不十分である。	1 ①決裁などを簡略化し、学校行事だけでなく普段の授業の様子や部活の様子などもその日の内に情報公開していく。 ②最近の行事写真や校内写真のスライド等をループ再生で流したり、パスワード付の在校生・保護者向けページを開設するなど。 ③WEBページ担当責任を広報委員会ではなく専門部に配置し、担当人員を増員する。 ④部活動顧問のPCに対する技術力等も関係しているので、サポート体制をつくる。 ⑤ホームルームや集会等で生徒へのアナウンスをして、ホームページの認知度を上げる。 ⑥学校通信並びに部通信は、共通の発行月を定め、各部と学校の取り組みの周知徹底を図る。
		2	オープンハイスクールや中高連絡会等を実施し、学校の取組等について詳細な情報提供を行う。	3.7	2 ①夏秋の2回のオープンハイスクールに加え、募集要項説明会の土曜日実施を行った。また、今年度からトワイライト説明会を何度も実施し、よりきめ細かい生徒保護者への情報提供を実施した。 ②学校説明会への参加者が増えている。	2 ①開校3年目ということもあり、一般的に学校の知名度は低い状態である。特に阪神間以外の地域では認知度が低い。 ②中学校や地域住民に対する情報発信がまだ不足している。 ③職員だけでなく、オープンハイスクールやその他の行事で多くの生徒が参加できるようにしている。 ④本校の実態（授業中の態度や生徒指導の内容）を理解していただくことに直結してはいない。	2 ①現在行っている校外への情報発信を継続させていく。 ②教職員全体で分担による中学校訪問・学校説明の実施。 ③イベントの内容や、運営方法を見直し、より効果の高い（本校の実態理解に有効な）内容に絞り込む。 （例：オープンハイスクールを近隣地域に対しても告知し、キーマンを招待する。パネルディスカッションを開き、保護者や近隣地域も含めて本校のあるべき姿（何を目標にして、どのような具体策を取るべきか）に結論を出す）
		3	設置趣旨を踏まえ、学校の教育活動等について、県のみならず他府県等にも、広く情報提供を行う。	3.2	3 ①学校長の東京での文部科学大臣への質問等でのアピール、学校パンフレット・1年の歩み等の作成と中学校等への配布、他府県からの視察等の受け入れなど広く情報提供を行った。	3 ①他府県への情報提供は一般職員は担当していない。 ②開校3年目の学校全体の教育成果等をまとめるべきである。	3 ①各種取組の定期的な報告機会の設定
		4	高校生ふるさと貢献活動事業や学校行事等を通じ、学校近隣地域の美化等に貢献する。	3.3	4 ①「地域ふれあい調理交流会」を実施し、少人数ではあるが、地域の方との直接的な交流の場を持つことができた。 ②年2回の全校一斉清掃活動や職員の日常的な巡回指導等を通して学校近隣地域の美化等に貢献した。 ③少年サッカー、少年野球にグラウンド等の学校体育施設を貸出し地域の青少年活動に貢献した。	4 ①ゴミのポイ捨てなど、近隣に迷惑をかけていることも多いと感じる。 ②地域への清掃活動など、今後とも継続的な活動が必要。また、生徒の参加を促す動きが不足している。 ③学校体育施設の開放など一部職員に負担が偏っている。	4 ①ゴミのポイ捨て等をすぐに改善するのは難しい。職員が発見したゴミを拾うようにする。 ②地域の人と共同で一緒に清掃活動の実施。 ③地域清掃ボランティアを募集し、教師と生徒が一体となって地域清掃を行う。 ④地域交流行事は、多くの教員で役割を分担してすすめ、さらに充実したものにする。 ⑤多くの職員で施設開放の分担。
	学校評議員制度等の活用	5	学校評議員会を年2回に実施し、意見聴取等を通じて学校運営の改善に活用する。	3.1	5 ①学校評議員に意見聴取等を実施し、その意見をもとに学校運営の改善に役立っている。	5 ①学校評議員会で生まれた改善点を全職員で共有できているか。	5 ①学校評議員の活用。
円滑な学校運営	各種会議の実施及び連携	6	年次会や各委員会等を適切に実施し、職員の共通理解を図る。また、校務運営委員会や職員会議等を通じ、各委員等会の意見調整を行い、円滑な校務運営を推進する。	3.5	6 ①校務運営委員会と職員会議を月2回定例として、弾力性のある運営に努めている。 ②教育課程委員会、心のサポート委員会、1部会、2部会、3部会、各教科会等の実施や情報伝達で、職員の共通理解を図った。 ③授業等で職員会議に出席できない教員に対して、校務運営委員会へのオブザーバー出席で可能な限り対応できるようにした。 ④概ね各委員会等会議は円滑に機能している。特に心のサポート等、直接生徒に関わることに關しては充実である。	6 ①授業等で常時会議に出席できない教員がいる点が課題である。 ②日程が重なったり1日にいくつもの委員会が開催される場合等がある。 ③職員数の増加に伴って、会議時間の確保がますます難しくなった。 ④職員会議に出席できない教員のオブザーバー出席が少ない。 ⑤職員会議等において、積極的な意見交換が少なく、有意義な審議がなされていない。 ⑥打合せ内容が不参加職員に伝わっていない。 ⑦創立時の意欲や共通理解を継承していく難しさ。 ⑧部主任会は校務分掌にはない会である。その位置づけが疑問である。 ⑨PDCAが回っていない。	6 ①各種委員会、定期会議等の日程のマネジメントの実践 ②今後も、校運へのオブザーバーでの出席等で共通理解を図っていく。 ③職員掲示板、メール、メモ等によりさらに効率的な情報伝達の推進。 ④意見交換の場があってもよいと思う。 ⑤職員間の情報交換を密にする。 ⑥検討事項を整理し、必要な情報をわかりやすく例示、メリット・デメリットを示し進行する。 ⑦管理職の正しいリーダーシップで乗り切る。 ⑧記憶ではなく記録を残す。会議後は必ず議事録を発行する。積み残しや繰り越し課題については担当者と期限を明確にし、管理職が具体的にフォローする。
勤務時間の適正化	業務のIT化・効率化	7	校内ネットワークの活用方法を研究し、情報と文書の共有化を図る。	3.1	7 ①校内ネットワークは良く整備されており、データの共有がしやすい。 ②各部の文書フォルダの整理法の統一により、資料の整理、共有の効率化が期待される。 ③教務支援システムで指導要録に加えて調査書の作成が可能になった。	7 ①共有フォルダで、使いたい資料がどこにあるのかがまだまだ分かりにくい。 ②校内ネットワークの活用による用紙の節約 ③各教室でのLANの利用はもっと広まっても良い。 ④管理職とのネットワークが別系統のため、文書が円滑に共有されない。 ⑤グループウェアの活用が推進されていない。 ⑥校内ネットワークを始めとするIT環境は整備されているが、十分に生かし切れていない。	7 ①フォルダのまとめ方を統一した方がよいと思う。 ②分かりやすいファイル名、分かりやすい場所に置くようにする。 ③職員掲示板等を活用し、打合せ内容やその日の日程の注意点を共有する。 ④教室でインターネットを利用した研究授業などを実施する。 ⑤管理職に校内LAN用のパソコンを持ってもらう。 ⑥ネットワーク環境の整備をする担当者の負担が大きいため、部署を明確にし、担当人員を増員する必要がある。 ⑦IT推進と業務効率化の分掌を設置する。 ⑧職員室机上PCを活用し、できる限りのペーパーレス化を図る。
	超過勤務の縮減	8	ノー残業デーの設定等により、教職員の超過勤務の縮減を図る。	3.0	8 ①ノー残業デー、ノ一部活動デーの実施で、教職員の勤務時間の縮減を図っている。 ②今年度より定時退勤日の増設により、職員の勤務意識が大幅に改善された。 ③きょうはノー残業デーであると意識はするようになった。 ④効率的に業務を行うことができた。 ⑤教職員の間で、助け合いの雰囲気が出てきている。 ⑥管理職による声かけ、従事時間申告書の提出等が徹底されている。	8 ①保護者への連絡や生徒指導等が入ることが多いので、定時退勤するのが難しい。 ②ノー残業デーはやや形骸化しつつある。 ③定時退勤日という言葉に束縛されて、仕事が中途半端になり、不十分な仕事内容になることがある。 ④多部制の特徴である勤務時間の変動があるため、健康保持が必要。 ⑤そもそもB勤は残業ではなく早出が多い。 ⑥勤務形態によって一部、休憩時間の確保がされていない。	8 ①勤務時間終了5分前になると音楽をかける。 ②ノー残業デーの趣旨を理解し、全職員で取り組む雰囲気をつくる。 ③定時退勤日のことも見越し、1週間先の見通しをもって仕事をする努力をする。 ④B勤の休憩時間は会議などでとれない場合も多いため、本来の時間に休憩できない職員のために、もう1つの休憩時間を設定する。 ⑤超過勤務者に対しては管理職が面談を実施し、具体的な対策を立てる。
学校運営	生徒指導体制の充実	9	生徒指導方針について、全職員の共通理解を図り、一体となった指導体制を整備する。また、関係機関等との連携を密にし、より実効性のある生徒指導に努める。	3.1	9 ①生徒指導部による、本校生徒の実態に即した焦らず丁寧な対話による指導が生徒の安寧につながった。 ②生徒指導の方針が職員で共有され、生徒が少しずつ良い方向へ変わってきているように感じられる。 ③個人面談や生徒と話す機会を増やし、その情報を共有することにより担任以外の教員も対応することができる。 ④研修会等を通じて、生徒指導の方針の共通理解が図れている。各生徒の問題に複数の教員で解決に向けて対処できている。 ⑤生徒の目線に立ち生徒との信頼関係を築くために努めた。少しずつ生徒たちとの距離は縮まってきたように感じる。 ⑥中学校などとの生徒情報交換等が実施されており、指導にも役立っている。 ⑦教員全員が輪番で実施した地域巡回	9 ①実効性のある生徒指導とは何か。 ②多様な生徒と関わり合っていくための職員間の連携や役割分担。 ③従来の指導の型に当てはまらない退廃的な態度をとる生徒に対応できなかった。 ④生徒数が増加し、困難なケースも増えている。 ⑤「生徒指導の足並みが揃っていない」との指摘が教員間でされている。 ⑥「社会のルールが学校のルール」というのなら、学校として、社会のルールに沿ってもっとキチンと生徒指導すべき。 ⑦生徒指導の成果(まとめ)が報告、検討されていない。 ⑧関係諸機関との情報共有が不足している。	9 ①方針に従えない生徒に対して強硬策を最後の部分ではもっておかないといけない。 ②いいことはいいい、ダメなものはダメ・・・最低限教えるべきことだと思ふ。 ③さまざまな事が起こるので、小さな案件でもベテラン教員と若手教員が組んで対応する必要がある。 ④喫煙に対して、各部、生徒指導部で注意・呼びかけ、保健から喫煙に関する保健指導等、様々な面から指導していく。 ⑤生徒たちと良い距離感を保つため、日ごろの生徒たちに対する接し方、言葉遣いを意識していきたい。 ⑥全職員でこの学校をどうしていきたいかを話し合う場、もしくは意見を出す機会を増やす。 ⑦本校の生徒指導方法の研修会の実施(4月) ⑧次年度に向けた生徒指導上の反省、方向性の検討及び報告会の実施(3月) ⑨関係機関との連携をより強化していく。

領域	評価の観点	評価項目	実践目標	本年度評価	成果	課題	改善策
高	生徒指導	生徒の内面理解を図る指導の推進	10 個人面談・家庭訪問・カウンセリング等により生徒理解を深める。また、心のサポート委員会を中心に、指導法等の共通理解を図る。	3.5	1 0 ①心のサポート委員会により、生徒の状況や指導法の共通理解が図られている。 ②コーディネーター、カウンセラー、警察、中学校等と情報交換し、細心の注意を払いながら生徒指導等に努めている。 ③面談日での個人面談（年2回）、夏休み前の3者面談、家庭訪問等の実施で、生徒への理解を深めた。 1 1 ①生徒会活動が以前に比べて活発化し、生徒の自主性が生まれつつある。 ②体育祭、文化祭などの学校行事が生徒会を中心に取り組めた。	1 0 ①心のサポート委員会で解決できたというイメージが持ちにくい。 ②生徒が増加し、要配慮生徒も増加し内容も複雑なものが多い。 ③連絡をとりづらい生徒の状況を知ることが難しい。 ④生徒同士の多様性（一人一人が違っていてよい！）をもっと認める呼びかけを行う。一人（孤独）でも居心地のよい学校空間づくりを築く。	1 0 ①さまざまなルートを使って、生徒の状況をつかんでおけるようにする。 1 1 ①生徒自身にできる部分を教員側が考え、少しでも生徒が自主的にできる部分を増やしていく。 ②生徒会活動を一般職員も支援できるよう、活動内容を周知できるようにする。 ③行事をさらに精選するか、もしくは、さらに準備に時間をかける。 ④生徒会執行部が生徒会行事の運営や活動の先導をすることで、他の生徒の自主性を高めることができる。
		生徒の自主性を育む指導の推進	11 生徒会を中心に、行事や部活動の運営に取り組み、生徒の自主的な活動の機会を設定する。	3.0	1 1 ①インターンシップが2年目に入り、成果を上げている。 ②進路保健部の就職支援は非常に生徒の役に立っている。 ③卒業予定者の就職希望者に対して職業観、就労意識の育成を測ることができた。 ④就職者向けの講座（数学Aα）を開講した。	1 1 ①生徒の自主的な部分に関してはまだまだ生徒自身だけではなかなかできないところがある。 ②生徒指導関係の行事の要項がもう少し早く分かると、個々の生徒に対する事前学習等に時間を費やすことができると思う。 ③不真面目な生徒の存在が自主的な取り組みに関する不公平感などを生み出してしまう。 ④生徒会活動が職員に周知されておらず、縁の下で頑張ってくれているであろうと思われるが、どんな活動をやっているのかわからない。	
キャリア教育	キャリア教育・進路指導	キャリア教育・進路指導体制の充実	12 キャリア教育に対する全教職員の共通理解を図り、進路保健部と各部署が連携して指導にあたる。	3.2	1 2 ①年4回キャリア教育推進委員会を実施し、計画の見直し及び内容の検討を行いながら、①総合的な学習の時間、②進路指導、③授業の3本柱によるキャリア教育が体系的に推進されるようになった。 ②進路指導研修会を年2回実施して進路指導の方法及び1～3部の各部署で実施したキャリア教育の情報共有を図り、卒業予定生徒の進路指導情報交換会を年4回実施し、進路保健部と1～3部担任・副主任と連携して進路指導及び支援をした結果、12名が就職内定し、32名の進学が決定、30余名が進路未定。（12月1日現在） 1 3 ①職業別ガイダンスにより生徒たちが就きたい仕事の話を知ることができ、進路についての意識が高くなっていった。 ②総合的な学習の時間等の利用で、外部講師等を活用しながら、生徒の職業観の醸成を図っている。 ③個々の生徒の進路希望に応じたアドバイス等ができています。	1 2 ①就職先のさらなる開拓。 ②生徒のより現実的な進路希望の把握。 ③全体としてのキャリア教育はかなり推進されているが、多様化する個々の生徒に対するキャリア教育はほとんどできていないのが現状である。 ④次年度からは卒業生徒も増加していくため、より進路保健部と各部署の連携を強化していく必要がある。 ⑤卒業できればよいという生徒の進路意識向上が最大かつ困難な課題。 ⑥大学進学を真剣に考えている生徒への対応をすべきではないか。補習も含め、対応すべき。『大学へはいけない』という学校のイメージが付くのはよくないと思う。また、フリーターが多い。原因を探るべき。	1 2 ①入学後、早い時期からの進路指導実施。特に就職希望者に対しては1年次からの成績、欠時数の大切さを意識づけることが必要。 ②進路アンケートをしっかりととり、進路希望がはっきりしている生徒には、早いうちから進路準備をさせる。学力があり、高い進路の希望をもっている生徒に対しては、補習をおこなう。また、フリーター希望者の面談をするなど、メリハリのある指導を行う。 ③入学から卒業までの間に生徒にどんな力を身に付けさせたいかを決め、LHRや学校行事を通じてスモールステップで達成させていく。 ④3年卒、4年卒に分けた具体的な進路指導方法等の検討 ⑤キャリア教育の教材や実践例を紹介し、キャリア教育研修会などで、実践例の取り組みを教職員自身が実践体験する。
		進学者向けの補習や就職講座を計画的に実施し、卒業後の進路を切り開く力を育成する。	13	1 3 ①欠席の多い者はどうしようもない。 ②入学当初から進路についての意識付けを行い、授業等への意欲を高めることが課題である。 ③インターンシップ受け入れ企業、指定求人企業の更なる開拓。将来の就職を覗きだうえでのインターンシップであることの意識付け。 ④進学希望者への補習や、より高度な学習内容を求める生徒への対応は遅れている。	1 3 ①卒業予定生徒を中心とした個別の進路指導の早期実施。 ②卒業年度9月以降の就職未内定者及び進路未決定者に対する進路保健部と担任とが連携した継続的個別指導。 ③大学進学希望者に対しては、授業内で対応することが難しいが、補習など今後対策が必要。 ④しっかりとした就労意識の育成(内定をもらうだけでなく離職しない指導)。 ⑤具体的な社会人スキルを向上させる。		
		主体的な進路選択能力の育成	14 LHR・総合的な学習の時間・部集会・面談等、様々な教育活動を通じて、個々の生徒に自身の生き方を考えさせ、進路意識を高めさせる。	3.0	1 4 ①「総合的な学習の時間」を中心に実施している進路学習が、進路指導部の企画・運営する授業に偏りすぎている傾向がある。 ②LHRや部集会で時間を持って余しており、教育効果の薄い時間を過ごしている。 ③LHR・総合学習で実施する内容が複雑である。	1 4 ①進路学習・キャリア教育の方針及び全体計画は「総合的な学習の時間」を中心に進路指導部が作成するが、1～3部生徒の状況に合わせて各部署が企画・実施する授業回数を増やす。 ②入学時から進路に対する意識を高めるため、卒業生の講話や、企業の方の講話等行う。 ③フリーター、ニートなどの実態についての授業、講演を設定する。	
教職員の資質向上	教科指導力の向上	15 研究授業や公開授業週間により、教職員相互の教科指導力の向上を図る。	3.4	1 5 ①公開授業週間の実施により、自分の教科だけでなく、他教科の教員の授業を見学するなど、教職員相互の教科指導力の向上を図っている。 ②他校にも公開した研究授業を行うことができた。 ③日々の授業そのものがOJTになっている感がある。 ④生徒による授業アンケートの実施及びそれに対する改善策を各教科で検討することによって、授業改善を図っている。	1 5 ①研究授業が役に立つような授業が維持できなかった。 ②同じ職員ばかりが研究授業や公開授業担当となっている。 ③研究授業後に十分に研究協議の時間が確保できていない。 ④時間帯により、同じ教科の教師の研究授業を参観できない場合がある。	1 5 ①授業者が困っていることを質問できるような形にし、授業者の不足点を指摘するような形式をとらない。 ②勤務年数関係なく、取り組むべきことである。 ③全授業を公開授業と位置づけ、授業を通じた職員間のコミュニケーションを密にする。 ④生徒による授業アンケート結果を、より有効に各教科で活用。	
	校内研修の実施	16 学校等の諸課題について、適宜、研修会を実施し、教職員全体の資質向上を図る。	3.4	1 6 ①本校だけでなく、特別支援学校の研修会などにも参加できている。 ②非常に有意義な校内研修会を数多く実施できた。生徒指導、人権教育、キャリア教育等実践的な研修会が実施され、講師の人選も本校の実態に即したものであった。 ③研修内容としてグループワークも含まれることもあり、考えさせられることも多く、大変勉強になっている。 ④若手教員の資質向上研修会や臨時教職員研修会を実施した。	1 6 ①マル秘プリント等の机上での保管や教務手帳等を教卓において離れたり等、教職員全体の危機管理意識の向上。 ②学校等の諸課題について、職員の見聞を集めたり、話し合ったりする機会がない。 ③教職員間のキャリアを紹介することによって、職員相互のキャリア形成を刺激し合う。 ④ミドルリーダー研修会等が実施できていない。	1 6 ①職員研修会か新聞記事等の事件を例に挙げた日頃の注意喚起のさらなる実施。 ②日常的に教職員が互いに声かけ等でチェックできる人間関係の構築。 ③職員室や飲み会の愚痴で終わるのではなく、具体的な対応策を話し合っ決めて決める場をつくる。 ④各部署で連携した教職員の研修計画の立案及び提示	
危機管理体制の整備	家庭・地域・関係機関と連携した危機管理体制の充実	17 日頃より警察・消防・病院等、関係機関との連携を密にし、様々な危機に対応できる体制を整える。	3.2	1 7 ①日頃より、危機管理体制は充実していると思われる。 ②関係機関との連携は図れている。 ③危機管理マニュアルが策定されている。	1 7 ①危機管理体制の整備が難しい。	1 7 ①危機管理マニュアルの見直しと点検を継続していき実効性のあるものにする。	
	生徒の危機管理意識の醸成	18 阪神・淡路大震災と共同避難訓練を行い、体験的に生徒の危機管理意識を醸成する。	3.2	1 8 ①避難訓練について、高等学校と特別支援学校の生徒が共同で行い、実際に生徒に体験させることができた。	1 8 ①避難訓練の際、生徒の真剣さが欠けており、危機感も低いように感じる。ただの訓練だからという意識がある。 ②多部署単位制であり、生徒の状況を把握しにくい。（1～3部の生徒が授業がない時間に来ていることが多い） ③阪神淡路大震災や東日本大震災に対する研修ができるような時間があればいいのではないかと、阪神淡路大震災については、生徒が生まれる以前の話であり、兵庫県民としては、必要不可欠な教育だと思ふ。 ④危機管理に関する教職員の認識が不足している。 ⑤避難訓練が十分有効に機能していない。訓練時のチェック項目や、結果の評価項目が不明確。	1 8 ①生徒への事前指導の必要あり。実際の震災の様子の映像等を利用して視覚的に訴え、危機感を持たせる。 ②避難訓練以外にも震災教育・防災教育についての学校としての位置づけを考える。 ③震災・防災研修会の実施 ④災害発生時のシミュレーションを、訓練前に徹底的に実施すること。それに基づき、具体的な訓練項目を決定すること。	
基礎・基本の徹底	生徒の学力把握と評価基準の設定	19 小テスト等を活用し、生徒の学力把握に努めるとともに、各教科で適切な評価基準に基づいた評価を実施する。	2.9	1 9 ①小テストを行い、スモールステップで理解を促すことができた。 ②授業での小テスト等で、定期考査以外の部分での加点を行い単位修得の助けとなっている生徒も多い。 ③毎回プリント提出を課し、生徒の学習状況を把握している。 ④評価基準をシラバスにも掲載し、生徒にどのような点を評価しているのかわかりやすくした。 ⑤昨年度から基礎学力テストが導入され、生徒の基礎学力を把握する試みが始まっている。	1 9 ①個別生徒の綿密な学力把握がさらに必要。 ②不登校等での学業不振や障害等により、極端に低学力の生徒の数が増えてきている。 ③人数に関わらず基礎学力の個人差が大きく小テストですら行いにくかった。	1 9 ①机間巡視の時間をもう少し多く取り、生徒の様子を見るようにしたい。	
	個に応じた学習指導の充実	20 少人数授業を実施し、生徒一人ひとりの学習状況に応じた指導を行うとともに、必要に応じて、補習等を実施する。	2.8	2 0 ①少人数授業により一人ひとりの進度に応じた教科指導ができています。 ②丁寧な教材作成を心がけ、生徒の学力に応じた指導を行った。 ③習熟度別の授業を設定し、苦手意識のある生徒に対するサポートができています。 ④パソコンやモニターテレビを活用し、生徒の実情にあったわかりやすい授業を行っている。 ⑤45分＋45分授業の効果的な授業形態が実践できている。 ⑥夏期休業期間中を中心に補習等を実施した。	2 0 ①生徒の学力差が激しいため、一人ひとりの学習状況に応じた指導を行うのが困難。 ②高校卒業に値する学力（教科書内容）を保証できる授業を展開することが困難である。 ③20人を超える講座は本校では静粛を保てない。 ④苦手な科目を避けることで、特定の教科に人数が集中し、少人数ではない。 ⑤一生懸命に授業に取り組む生徒と授業妨害に値するような落ち着きのない生徒がいる中でいかに授業を成立させるか。学力をつけさせるか。 ⑥補習等は一部の教科でしか実施されていない。 ⑦補習を行いたいのが、3部制の時間割のため、継続的に使える場所がない。また、個別指導する部屋が少ない。 ⑧授業に出られない生徒への対応。 ⑨生徒のモチベーションをあげるためにも学力を客観的に図る尺度が必要。ベネッセの進路マップは、いいと思う。 ⑩低学力生徒への補充等がまだ不十分である。	2 0 ①可能な限り、習熟度別にすべきである。 ②生徒の特性（学習意欲が高い/多動傾向が強い等）に応じたクラス編成を実施する。 ③どうしても学力の低い生徒へのフォローが中心になってしまっているため、『個に応じた』というなら、士気の高い生徒にもフォローがいる。 ④説明と演習の時間配分、より分かりやすい授業の工夫。 ⑤さらに生徒の実態に応じたわかる興味の持てる授業の実施。 ⑥数種類のプリントを作成し、どの段階からでも授業に参加できるようにする。 ⑦個々の生徒への学習意欲づけへの努力。 ⑧○○入門等の講座を受講させて、基礎から教える。 ⑨長期休業中の補習・補充授業の実践 ⑩補習について、教室や時間が確保できない場合は、課題を配布し、自宅学習を促す。	

領域	評価の観点	評価項目	実践目標	本年度評価	成果	課題	改善策
教育課程	特色ある教育課程の編成	多様なニーズに対応した教育課程	21 生徒の幅広い学習ニーズに対応した教育課程の編成を推進する。	3.1	2 1 ①単位的特徴を活かし、授業を自由に選択できるようなカリキュラムになっている。 ②多くの学校設定科目を設置し、通信制課程や高大連携等、多様なニーズに対応した教育課程の編成ができています。 ③ノーマライゼーション、対人援助、地域社会への支援など、特色ある教育課程の編成に努めている。 ④H27年度より「〇〇入門」等の基礎からの学び直しの講座を開講し、生徒の実情にあった講座開講を目指している。	2 1 ①生徒の学力差が大きいのでそのニーズに合わせて、多段階に区分けされた講座が必要になる。 ②実践目標に「幅広い学習ニーズに対応した」とあるが、どのようなニーズを把握しているのかわからない。 ③H27より開講の「〇〇入門」の効果的な指導の確立。 ④国語、数学、英語、理科、社会以外の教科で、実技や実習をとまなう教科・科目を充実できないか。教科の学習では疎外感を抱く生徒でも、自己達成感を感じることでできる科目がたくさんあればいいと思う。	2 1 ①上位年次の選択できる科目をさらに開講していく。 ②漢字検定・そろばん等学校全体で取り組める実感の持てる学習課題を設定すると良い。学習意欲や授業を受ける姿勢につながる。
		計画的な学習等の指導	22 生徒の学習状況等に応じた受講ガイダンスを行い、計画的な学習等についての指導を行う。	3.1	2 2 ①生徒ごとに受講ガイダンスを実施し、個別に生徒の希望に添った時間割を作成している。	2 2 ①特色ある教育課程をほとんど活用することがないことも実情である。 ②受講ガイダンスが生徒に伝わらない ③生徒自身が、学校の特徴やシステムを理解する。 ④学力の高い生徒への対応がないように感じる。伸びる生徒もいるかもしれない。 ⑤各教科、科目と入門との連携が、受講登録の際の担当者に理解・把握されていない。また、学校設定科目「入門」の具体的な指導方法が検討されていない。	2 2 ①シラバスをもっと簡略化して書く。 ②教職員のための受講登録説明会の実施。 ③新たに設定される入門科目において、小・中学校内容の学び直しを促したい。 ④定期試験ごとに頑張った生徒は、褒めてもいいのではないか。勉強を頑張った生徒への励ましが必要。
	総合的な学習の時間	創意工夫を生かした取組	23 生活体験発表会を活用し、生徒の体験に基づいた取組を推進する等、学校の特色を踏まえた学習テーマを設定し、計画的に取り組む。	3.2	2 3 ①生活体験発表会は、生徒数が増え充実し熱心に取り組んでいる。 ②生活体験発表会を活用することができている。 2 4 ①綿密な年間計画や毎週の事前打ち合わせによって、全体の足並みがよく揃っている。	2 3 ①生活体験発表会は一部の真面目な生徒の実績に頼らざるを得ない。 ②生徒自身が、自分のプライベートを発表するのを、とても嫌がる。 ③今年度の生活体験発表会は、静かに聞くことができなかった生徒も多かった。 ④生活体験発表作文への取組みが、生徒の学習成果に十分つながっていない。	2 3 ①自分のことを少しずつ発表できるようになることも、成長のひとつであるということ、少しずつ時間をかけて指導していく。 ②「①集中力がない生徒」「②作文が苦手な生徒」「③発表が苦手な生徒」「①②③すべてを抱えた生徒」等、成果を出せない理由は様々。クラスの単位で指導するのではなく、抱える課題の単位で指導し、達成ステップを明確にすることで、達成感を与える。
教職員の共同体制の確立		24 総合的な学習の時間に係る計画等について、委員会等を通じ、教職員の共通理解を図る。	3.4	2 4 ①生徒の多様な卒業年数や進路希望状況に対応するため、年度当初に配当された時数以上に「総合的な学習の時間」を担当せざるを得ない教員が生じた。 ②まだまだ就職を含め進路に関して意識の薄い生徒が多い。 ③総合的な学習の時間の中で、年次ごと、部ごとに行う企画ができるような体制があればありがたい。 ④3年次、4年次の具体的な計画の立案が不十分である。	2 4 ①「総合的な学習の時間」の授業担当者が実際の時数を含めて、週当たりの適正な担当授業時数になるように配慮する。 ②卒業年次に向けた進路計画の立案		
課題教育等	人権教育	人権教育推進体制への取組	25 人権教育研究推進委員会を中心に、ノーマライゼーション委員会、総合的な学習の時間推進委員会、交流及び共同学習委員会、心のサポート委員会等が協力し、生徒の人権意識の高揚に取り組む。	3.4	2 5 ①委員会が連携することで、生徒の人権意識を高めることができています。 ②今年度の研究指定により、一層多方面からの人権教育が進められている。 ③学校設定科目や共同学習、また日々の生徒指導等、日常実践がそのまま人権教育につながっている。	2 5 ①生徒自身、相手を傷つける発言や行動が多い。 ②人権意識付けへのさらなる努力。 ③女性差別・就職差別・外国人差別等の学習も必要ではないか。 ④全校清掃などで、まったく知らない生徒の担当になった場合、その生徒が自閉症だということを知らず対応がわからない。 ⑤各委員会での討議内容、決定事項が、出席者以外に伝わっていない。	2 5 ①問題が発覚するたびに、ていねいに指導する。 ②授業等で日常的に人権意識高揚に取り組む。 ③廊下やトイレ等の標語などの活用。 ④合理的配慮についての職員の啓蒙と個々の生徒への必要な対応を組織として理解する。 ⑤各委員会の議事録の発行
	交流及び共同学習	両校の共同体制の確立	26 交流及び共同学習委員会を中心に、両校職員の共通理解を図る。	3.0	2 6 ①交流及び共同学習委員会を定期的に開催し、生徒の様子や内容等について報告し、意見を出し合っている。 2 7 ①教科ごとに両校の生徒実態に合わせ学習形態等について研究を進めながら、その拡充を図っている。 2 8 ①行事や部活動、休み時間等で一緒に過ごす時間が増え、交流する機会が増えている。 ②食堂などでの枠組みの緩い交流においても、安心して見守れるようになっている。	2 6 ①交流及び共同学習委員会は現状報告の場所ではなく、問題点や達成目標がわかりづらく、改善策を十分に話し合っていない。 ②共同の学びの授業に関する打ち合わせや反省会が委員会以外で設定されていない。 ③できることは今が限界でこれ以上深まるような気がしない。 ④両校の教職員及び生徒間の日常的、非構成的場面での交流を広めていくための工夫や意欲。 ⑤職員同士の交流が少なく、共通理解などほとんど図れていないように感じる。お互いのやりやすいように動くので、混乱が生じていることがある。	2 6 ①どのような成果を目指しての「共同」の学びであるのか等、根本的な部分の共通理解を両校の職員間で図る機会をつくる。(方向性のズレを感じることもあるので) ②共同職員会議等で意見交換をする。 ③共同の学びや両校合同の学校行事を実施する以上、徹底して生徒指導をすべきである。
		共同の学びの拡充	27 両校生徒が共に学ぶ教科・科目や学習形態等について、研究等を進めながら、その拡充を図る。	3.0	2 9 ①バトミントン、陸上、サッカー、ダンス、空手、バスケット部等で交流を行っている。 ②阪神見陽祭において、同じ部活動で両校の生徒が舞台上上がることができていた。 ③両校生徒が教えあひながら部活を行い、他人を思いやる気持ちが養われている。	2 7 ①特別支援の生徒に向けての授業方法・場面対応など、実質的な事例を高校教員が学ぶ必要がある。特別支援の生徒への授業を、未経験の高校の教員が行うことは困難であるように感じる。また、根本的な授業のあり方についておおいに疑問が残る。 ②新しく赴任された先生方まで共同の学びの理念や進め方などについて浸透していないように感じる。 ③実際に両校の生徒が共同のもと、授業に取り組んでいるかといえは不十分なところがある。 ④「特別支援の生徒でもできているのに」という言い方をした生徒がいたので、少し気になった。 ⑤授業の人数、カリキュラムに不都合が発生した。また、実施場所、経費の面で問題等が発生している。 ⑥高校の支援を要する生徒への指導の充実。	2 7 ①タイプごとに分かれた事前打ち合わせが必要であると思われる。 ②共同の学びの担当者の授業時間数を調整(軽減)し、特別支援の教員と、高校の教員の綿密な打ち合わせの時間を確保する。 ③両校生徒の学習進度が異なるので難しいとは思いますが、両校の生徒の実態、状況などを把握したうえで共に学べる環境、教材を考える。 ④共同の学びの授業が始まるまでに、両校の職員が共通の意識を持てるようにする。 ⑤交流のきっかけをこちらからつくる。授業で分からないことを質問し合えるきっかけ、行事で協力して助け合えるきっかけなど。 ⑥高校の生徒が特別支援の授業に参加してもいい刺激になるかもしれない。 ⑦予算に応じた実施を検討。
		共同の学校行事の拡充	28 校内で実施する行事だけでなく、遠足等、校外で実施する行事についても、両校共同で行う取組を推進する。	2.6	2 8 ①校外で実施する行事では、芸術鑑賞会、生活体験発表会は高校と特別支援合同で行っているが、遠足や修学旅行は高校と特別支援で別個に行っている。 ②授業(共同の学び)や学校行事において、高校側の生徒の、人間としての品格が問われるような言動が目立つ。 ③当初に比べ、学校行事での交流は減少傾向にある。 ④大きな行事でマニュアルがなく、わからない点や係の仕事が不透明である。食品模擬店など衛生面安全面への配慮が必要である。	2 8 ①校外で実施する行事では、芸術鑑賞会、生活体験発表会は高校と特別支援合同で行っているが、遠足や修学旅行は高校と特別支援で別個に行っている。 ②授業(共同の学び)や学校行事において、高校側の生徒の、人間としての品格が問われるような言動が目立つ。 ③当初に比べ、学校行事での交流は減少傾向にある。 ④大きな行事でマニュアルがなく、わからない点や係の仕事が不透明である。食品模擬店など衛生面安全面への配慮が必要である。	2 8 ①遠足や修学旅行は、現状のまま別個で行うほうが良い。 ②長い目で見れば、遠足は両校共同でも実施できる。 ③行事など、両校から実行委員会を選出するなどして意見のすりあわせを数多く行うようにする。 ④わかりやすいマニュアルを一冊にまとめて全職員が行事の際に携行できるようにする。
		両校生徒による部活動の実施	29 同じ部活動において、両校生徒が、ともに練習等に取り組む、交流や相互理解を深める。	3.2	2 9 ①部活動において、もっと積極的に両校が交流する形をつくるべき。 ②部活動において、ごく一部の部活動しか交流できていない。 ③両校の生徒、教員が同時に活動できていない日が多い。	2 9 ①部活動において、もっと積極的に両校が交流する形をつくるべき。 ②部活動において、ごく一部の部活動しか交流できていない。 ③両校の生徒、教員が同時に活動できていない日が多い。	2 9 ①土、日曜日を活用し、両校合同練習などの日程を設定し、両校職員、生徒との交流の機会を増やす。 ②部活動については積極的に両校の顧問が協力し合えるとういと思う。 ③会議などの曜日を調整し、特別支援学校と多部制高校の生徒が基本的には一緒に活動できるようにする。
学校設定教科「共生社会と人間」	創意工夫を生かした取組	30 学校設定教科・科目において、関係機関等と連携した体験的な学習等、創意工夫を生かした授業を推進する。	3.4	3 0 ①「ノーマライゼーション」を生徒全員が受講登録させることで、本校の特色の理解度が維持・向上している。 ②車イスやバスを用いた実習等他校にはない体験的な学習が実施されている。また、各種ボランティア団体等から講師を招き、生徒たちにとっては身近な体験ができる貴重な機会を設定した。 ③ノーマライゼーション、対人援助、地域社会への支援では、各関係機関と連携を行い、創意工夫をして授業を行うことができています。 ④効果的なテーマの精選が進められ、内容が深められている。 ⑤「ノーマライゼーション」では生徒の障害者に対する意識が高まっている。	3 0 ①ノーマライゼーションは本校の基幹をなす学校設定科目である。ますます充実・改善が望まれる。 ②ノーマライゼーションは必修科目ではないのに、強制的に受講登録させているように感じてしまう。 ③一部集中できない生徒あり。取り組む姿勢にかなりばらつきが見られる。 ④生徒の聴講する態度が悪く講師の先生方に申し訳ない。次年度、講師を引き受けて頂けるのか心配である。 ⑤生徒の実情に応じた内容となっていない場合もあった。 ⑥対人援助や地域社会への支援では、受講人数が増えた中での実習や講義内容のさらなる検討が必要である。 ⑦対人援助や地域社会への支援での教員数、講座数が不足するなど機能性が不十分である。	3 0 ①他科目についてもいえることだが、受講登録前に、しっかりと内容を説明する時間をとる必要がある。 ②ノーマライゼーションという学校設定科目の内容を理解させた上で、本当に学習する気のある生徒に受講させる方がいいように思う。 ③応援体制をとり、対応していく。 ④必修にすることや評価基準を明確にすることが必要である。 ⑤講師との事前打ち合わせをさらに密にし、生徒にとってより意義のある内容とする。 ⑥対人援助や地域社会への支援での講座数及び配置教員数の検討。	
教職員の共同体制の確立	31 ノーマライゼーション委員会を中心に、教職員の共通理解を図る。	3.2	3 1 ①ノーマライゼーション委員会を中心に、新入生への「共生社会と人間」の指導の共通理解を図った。	3 1 ①授業担当者以外は、大まかな内容しか把握できていない。 ②担当者が全員集まりにくい。 ③ノーマライゼーション委員会のメンバーだけでなく、様々な職員に対して、実践できる機会が欲しい。	3 1 ①生徒の感想等を回覧するなどして、共通理解を図った方がよいと思う。 ②打ち合わせや職員会議等で担当教員以外に連絡することで、共通理解を図る。		